

本を携えて被災地を行脚 — 改訂版あとがき —

♣ 献本行脚へ

2011年10月に『東日本大震災津波詳細地図』が完成した際、できれば被災地の各家庭に配布し、仏壇の横にでも置いてもらって、子々孫々まで伝えて欲しいと思った。それには多額の費用がかかる。スポンサーを探したが、残念ながらどこの大企業も相手にしてくれない。やむなく初版の原稿料相当分を現物で受け取り、自治体の防災部局や地元関係者に配布するとともに、市町村ごとの防災マップを刷る際にはデータは無償提供するからなるべく全戸配布して欲しい、地元紙には見開き特集ページを発行して欲しいとお願いすることにした。

同年11月19～20日には全国鳴砂サミットが気仙沼であるし、25日には盛岡で三陸ジオパークシンポジウムもある。これらへの出席も兼ねて、気仙沼を皮切りに北上して下北半島まで行き、反転して南相馬まで献本行脚をすることにした（共著者の原口氏はその後、御前崎まで南下した）。

各地では瓦礫は片づけられてあちこちに山積みされ、建物の土台だけが残る荒涼たる光景が広がっていた（写真1）。被災直後の無惨な情景はテレビや新聞で見ている。しかし、明るい空の下、広々とした更地を見ていると、かえって背筋に寒さを覚え、ゾクッとした。まだ成仏しきれない魂が「千の風」になって吹き渡っているのだろうか。

以下、心に残ったことを防災面に限ってメモ風にし書き留める。



写真1 気仙沼市最知

♣ 気仙沼：第二の故郷

気仙沼は私の卒論調査のフィールドであり、^{からくわ}唐桑半島から気仙沼大島まで、くまなく歩き回った。修論では北上して陸前高田を歩いた。三陸は私にとっては研究生生活を始めたスタート地点、いわば第二の故郷である。

もちろん、40年以上前のことであり、当時お世話になった方々はとうに鬼籍に入られているが、3.11以来、気になって仕方がなかった。卒論調査では気仙沼駅前の松屋旅館に、下宿料金という格安で泊めていただいた。その後、東京大学と鹿児島大学の学生実習でも使わせていただいたことがある。おばさんが女手一つで切り盛りしていたし、一人娘は別の道に進んだから、もう廃業しているだろう。それに木造3階建てで当時でも老朽化していたから、残っていたとしても地震で倒壊したに違いないと思い込んでいた。

ところが、松屋旅館は無傷で建っているではないか（写真2）。今回の地震では、木造家屋の被害に直結する周期1～2秒前後の応答スペクトルが100cm/s程度以下と小さかったためらしい。それに住所は古町、地盤も良かったのだろう。一般にどこでも昔からあった古町は、新しく開発された新町や新田より地盤が良いところに立地している。ただ、残念ながら、旅館の扉を何度ノックをしても返事が無かった。



写真2 気仙沼市古町 松屋旅館



写真3 仮設の復興屋台村



写真4 越喜来の津波記念碑

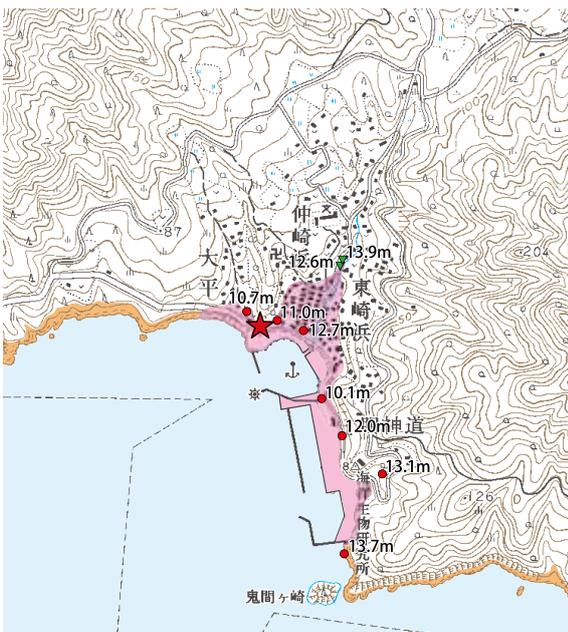


図1 越喜来の津波記念碑の位置 (★印)
本書 39「東崎浜」

♣ 復興屋台村

気仙沼の復興屋台村グランドオープンの日偶然居合わせた(写真3)。早速、呑みに出かけた。震災以来のことと大賑わい。「男子厨房」なる店に入った。奥さんを亡くされた方々が開業したのだろうか。聞きにくいので名称の由来は聞かなかった。

みんな陽気、大いに呑んで騒いでいる。でも、会話の中に、「俺のところは親父一人だけだったけれど、お前のところは3人だものなあ」なる言葉が耳に入った。皆、悲しみを抱えながら、少しでも前向きに生きていこうと必死に明るく振る舞っているのだろう。胸が詰まった。

隣席に座った見ず知らずの人と仲良くなり、携帯電話で撮った写真を頂戴した(写真4)。場所は大船渡市三陸町越喜来(図1)、「仕事でよく行くところなのだが、こんな藪の中に石碑があるとは知らなかった、今回の津波で洗われて出てきた」という。「長く大きくゆれる地震は／津浪の警報と心得／直ちに近くの高地へ避け／一時間位はその場を離れるな」と適確に書かれている。

最下段の文字が草に隠れているので全部写った写真が欲しいと岩手県立博物館に問い合わせたが、データベースにもなく、後ほど職員を派遣して撮影した写真を送ってくださった。東京朝日新聞社が1933年の昭和三陸津波後に寄贈したものらしい。

寺田寅彦は『津浪と人間』(1933)で、「そうしてその石碑が八重葎に埋もれた頃に、時分はよしと次の津浪がそろそろ準備されるであろう」と喝破したが、まさにその通りになった。われわれの『津波詳細地図』が、直接の避難行動につながるインテリジェンスになって欲しいと願う。

♣ 被災遺構

津波に襲われたところは前述のように大部分更地になっていたが、被災した大きなビルや陸に乗り上げた大型船など、生々しい被災の爪痕が各地に残っていた。気仙沼市鹿折の第十八共徳丸、宮古市のたろう観光ホテル(写真5)、南三陸町の防災対策庁舎、大型バスが屋上に載っている雄勝公民館などである。

寺田寅彦の言うように記念碑は役立たないし、テレビやネットで公開された映像は恐怖心をあおるだ



写真5 たろう観光ホテル

けで、どこか現実感がなく、人ごとと受け取られがちである。現地にある現物ほど説得力のあるものはない。遺族の方々にとっては1日も早く撤去して欲しい、見たくないものである。しかし、広島原爆ドームも反対があったが残され、今では世界遺産となり、原爆の悲惨さと戦争の愚かさを伝えている。平和修学旅行の中心施設ともなった。

適当な耐震補強と防錆塗装を施して、被災遺構として残せないものだろうか。100年後の子孫の命を守るために、今の感情を抑えていただけなものだろうか。単なる観光施設としてではなく、祭壇や献花台を設け、鎮魂の場とするのである。「平和の礎」のようにご氏名を列挙してもよい。

♣ 吉里吉里中学校

大槌町では町立吉里吉里中学校に立ち寄った。ここでは以前、原口氏がジオスライサーで津波堆積物を採取したところだ。

従来、津波堆積物研究は、押し波が砂丘を乗り越えて後背湿地や砂丘湖に堆積したものを対象にしていた。津波には押し波もあれば引き波もある。氏は三陸の内湾に目をつけた。まさにコロンブスの卵である。当然と言えば当然。今なら内湾の海底に瓦礫がたくさん堆積していることだろう。東北大学や産業技術総合研究所のチームでは仙台平野から相馬まで貞観津波堆積物があることを確認し、M8.5程度の地震と見積もった。しかし、吉里吉里まで達していたとなると、貞観地震の破壊面はきわめて大きくなる。M9になっても不思議ではない。

原口氏の採取した堆積物の剥ぎ取りが廊下に飾っており（写真6）、生徒たちの研究発表の図面も貼っ



写真6 吉里吉里中学校廊下の展示

てあった。中学生たちは知っていたのだが、学界に広く知られていなかったのは残念である。

♣ 役場の被災

市町村によって復興の進み具合に若干差があるように見受けられた。もちろん、被災の程度などさまざまな要因があるのだろうが、役場が被災したところが遅れがちのように感じた。そうしたところはプレハブ庁舎だし、工事用の仮設トイレまで使っているところもあった。ある役場で対応してくれた課長さんは流暢な標準語を話す。おそらく他地域からの応援部隊なのだろう。いくら有能でも土地勘もないし人脈もない、きっとやりにくいにちがいない。

発災時から復興期まで、司令塔になる役場だけは高台に作って置いて欲しいと思う。各種手続きの度に坂を登るのは、住民にとっては不便だろうが、背に腹は替えられない。

♣ 雪っこ

陸前高田市立博物館学芸員の方が地酒「雪っこ」を持って宿に訪ねて来てくださった。その方は市役所の屋上で辛くも助かった由。よかった。

「雪っこ」の酔仙酒造も壊滅的打撃を受けた。内陸部の一関市千厩にある同業他社の協力で醸造施設の一部を借り受け、操業を再開したらしい。この「雪っこ」は再開第一号の銘柄であり、感慨深く頂戴した。白い濁り酒でうまい。千厩の蔵元は、ふだんはライバル関係なのだろうが、同業のよしみで助けの手を差し伸べたのだろう。

本来、どこの事業所も、災害時の事業継続計画（BCP：Business Continuity Plan）を日頃から策

定し、実践しておいて欲しいものだ。長期の休業は顧客離れを生み、いったん離れた顧客は戻ってこない。それは倒産や雇用の喪失、ひいては地域の衰退へ直結する。

これは民間会社に限らない。役所・学校・病院などすべてを含む。戸籍原簿の入ったサーバを流失した役場もあったようだが、姉妹都市にでもバックアップサーバを置いておくべきだった。職員の相互出向でもしておけば土地勘も人脈もできる。首長がニッコリ握手した写真を飾っているだけではもったいない。鹿児島のある消防局に聞いたら、大災害時には署員全員を緊急招集して事に当たりますという。妻子が下働きになっているときに、それを見捨てて出勤する署員がいるだろうか。途中の道路も寸断されているだろう。半分程度集まれば良いほうだ。そうした非常事態を想定していないのでは、混乱のつばに落ち込むだけである。

♣ 仮設住宅

途中、何カ所かの仮設住宅を訪問した。一時に大量の仮設住宅が必要になったから、やむを得なかったのかも知れないが、ゼネコン製の画一的なプレハブで、どうみても寒冷地仕様とは思われないものもあった。冬の防寒が心配だ。やはり、地元の大工さんと地元材を使ったぬくもりのある木造住宅にして欲しかった。間取りも融通が利くだろう。

集会所があり、看護師さんが健康診断に来るとのポスターが貼ってあった。聞くところによると、公平を重んじてクジで入居を決めたところ、集落単位で入ったところがあつた由。当然、前者は独居老人を生み、孤独死へつながりやすい。やはり、コミュニティは壊してはいけない。

♣ 消防車の墓場

瓦礫は分別が進んでいて、コンクリート塊の山、木くずの山と別々に山積みされている。石巻市で車の山の中に消防車の残骸がかためて置いてあつた(写真7)。おそらく避難を呼びかけてパトロール中に被災したのだろう。阪神淡路大震災では消防団員の犠牲者は1名だったが、今回は253名という。石巻は平場だし、浸水域も広がったから、犠牲者も多かったに違いない。暗澹たる思いで見つめた。お年寄りが、自分はこの家で死ぬのだといって避難の



写真7 消防自動車の残骸

呼びかけに頑として応じず、手こずった例も多かったらしい。

アメリカには"your own risk"という考え方がある。危険だという情報は伝えるが、それにどう対処するかは自己責任で、行政はそれ以上の責任を追及されない。わが国では、安心と安全はお上の責任で、何かあれば指弾され、裁判に訴えられる。アメリカ流が良いとは言わないが、防災はお任せという風潮は是正したいものだ。

♣ 大川小学校

石巻市立大川小学校では、全校児童108人のうち74人が死亡・行方不明となった(写真8)。すぐ近くに裏山があり、竹藪がある。ここに逃げ込めば、強い引き波があつても竹藪に引っかかって助かる。どうしてそうしなかったのだろう、というのが率直な疑問だつた。

報道によると、生き物としての勘に基づき、裏山に登ろうと言つた児童がいた由。この学校の運営実態を知るよしもないが、一般に、学校現場は管理主義が徹底され、教師には指示待ち人間が多い。教育委員会の指示を待っていたのだろうか。それとも藪



写真8 石巻市立大川小学校

でケガをすることを恐れたのだろうか。事故検証委員会が作られ、今も検証が続けられているようだが、二度とこのような悲劇が起こらないよう明確な方針を出して欲しいものだ。

♣ 家庭菜園

南相馬市は私の博士論文の調査フィールドであり、当時無料で泊めて下さったお宅に、今回も泊めていただいた。お世話になったご主人は亡くなられ、息子さんの時代になっていたが、奥様はご健在でうれしく思った。

この地域は福島第一原発から37km地点だが、耕作は禁止されている。本家は専業農家だが、どうしておられるのだろう。心配になった。それどころか、この地域ではおばあさんの唯一の楽しみである家庭菜園まで禁止なのだという。東京に嫁いだ娘さんから野菜が送られてくるとのこと。むごい話だ。息子さんが30km圏内で拾ってきた子猫がいた(写真9)。飢えて痩せていたそうだが、今ではまるまる太っており、この「原発捨て猫」がおばあさんの唯一の慰めになっている。

福島第一原発の事故は自然災害ではない。多重防御(フェールセーフシステム)を用意しておくのは当然のことだ。全電源喪失など論外である。かつて20年ほど前、鹿児島市内で大水害があり、地下室が水没した。病院など多くの施設が地下に機械室を置いていたから、非常用電源も使えず、大変だった。重量物を上部階に置くことは重心が高くなるから建築屋さんは嫌う。でも万一のことを想定しておくことが必要だろう。この鹿児島の教訓が活かせず、その後、東京渋谷でも福岡でも水害時に地下街で死者を出した。福島第一原発でも電源室は地下にあったらしい。



写真9 原発捨て猫

♣ 臨戦態勢

福島第一原発の30km圏には立ち入れない。やむなく福島から新幹線で帰ることにした。途中、飯館村を通過したが、至る所シャッターが下り、ゴーストタウンである(写真10)。交差点の信号だけが生きている。不気味だ。長期にわたって故郷を追われる人たちのことを考えると暗澹となる。

福島県庁に立ち寄る。災害対策課はごった返し、原子力保安院の方が記者会見をしていた。まだまだ臨戦態勢である。担当者は、この忙しい時に、と明らかに迷惑顔で、5分だけならと言う。だが、われわれの『津波詳細地図』を贈呈すると、態度がガラリと変わり、「原発に振り回されて津波まで手が回りませんでした、ありがとうございます。大熊町など役場が移転した町村には私共のほうで届けます」と、30分以上も親切に対応してくださった。福島県はこれから原発災害と何十年もつき合わなければならない。誠に気の毒である。



写真10 飯館村

♣ おわりに

被災地では、今なお避難中の方々が10万人を超すという。被災直後は、貧富の差など乗り越えて互いに助け合い、外部からの温かい支援も得られる。災害ユートピアが一時的に成立するのである。しかし、復興段階では、被害の軽重、貧富の格差、世代間の思惑の違いなど、さまざまな要因で軋轢がつきものとなる。まして高地移転など利害が錯綜し、生活再建の道は険しい。とはいえ、コミュニティを守り、故郷を愛する気持は同じであろう。一日も早く穏やかな生活が戻ることを切に祈る。

その後、気仙沼市・宮古市などはわれわれの『津

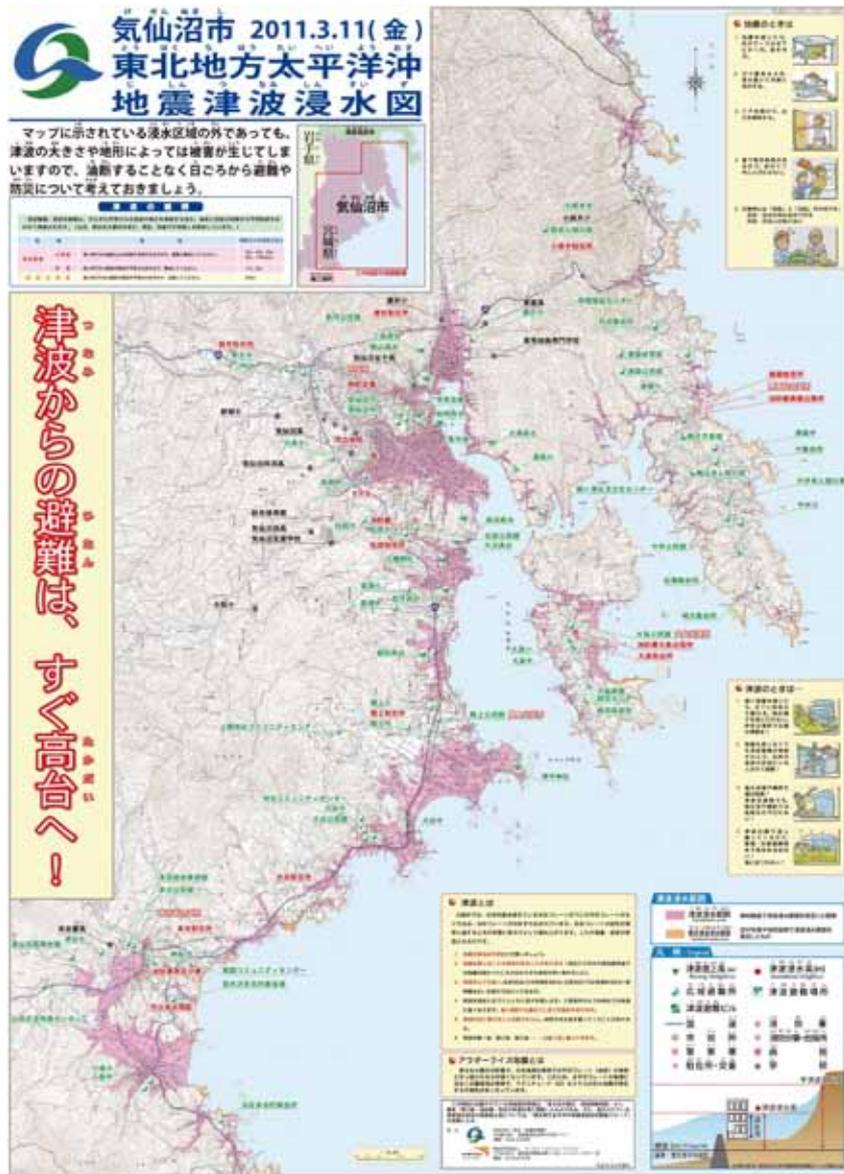


図2 気仙沼市津波浸水図

波詳細地図』に、新しく指定しなおした避難所・病院・交番などを加刷した防災マップを作成し、全戸に配布した(図2)。また、仙台市若林区上荒井地区のように『町内史』にわれわれのマップを掲載したところもある。

♣ 補遺：“津波破壊域”

われわれ研究者も含め、関係者は皆、「津波浸水域」という言葉を使っている。これに対して住民から、「浸水域では、ジワッと水が浸みてきた語感がする。津波はそんなものじゃない。たとえ膝くらいでも、あの流速ではとても立ってられない。また、どんな水泳の達人でも、漂流物に頭を打たれて脳震盪を起し、溺死したのだ。検死では溺死とさ

れていても、それが実情なのだ。津波破壊域とでも表現すべきだ」との意見が出された人とづてに聞いた。

以前、地質学では火砕流のことを熱雲と言っていた。雲仙普賢岳噴火の際、火砕流で死者を出したが、その時、ある地震学の大先生から、「地質屋が勝手に火砕流なる言葉に変えたから、熱くて危険というイメージが伝わらなくなったのだ。ケシカラン」と言われたことを思い出す。

2013年7月

岩松 暉